埼玉前衛青年芸術作家集団[1]

松永 康[2]

1949年に開始された「読売アンデパンダン展」[3]は、そのタイトルが示すとおり誰でも自由に作品を出品することのできる公募展であった。固定的な美術家団体に属さず、しかも伝統的な手法を否定することで既成の美術観を覆そうとしていた若い芸術家にとって、そこはおそらく当時唯一の公式な発表場所であった。革新精神に燃える多くの同志と出会い、激しい議論を繰り返しながら自己の信念を強化した美術家たちは、水戸の「ROZO群」や前橋の「群馬NOMOグループ」に見られるように、それぞれの地元においても地道に前衛運動を展開させるようになっていた。

この「読売アンデパンダン展」で問題作を発表し、話題をふりまいていた美術家のひとりに五月女幸雄がいた。五月女は埼玉大学教育学部美術科を卒業後、さまざまな素材を混合して絵画とも彫刻ともつかぬ作品を制作していた。五月女が、やはり前衛的な傾向の制作を行っていた大学の同窓の齋藤晃司、守屋直行、高橋俊彦らに声をかけ、「前衛」グループ結成の話は持ち上がった。

グループ結成となれば、まずは会長の選任である。彼らの先輩に、ちょうど「県南青年美術家連盟」展を発足させ、浦和周辺の若手美術家の先導的な役割を果たしていた彫刻家の島田忠恵がいた。五月女は、その島田に会長への就任を働きかけた。一方で美術教師仲間のつながりで五月女と親交のあった武蔵野美術大学出の鯨井肇(洪)も、この会の結成に関心を示したひとりであった。鯨井は、彼の郷里である熊谷周辺の美術家に参集を呼びかけた。こうして「埼玉前衛青年芸術作家集団」は、1961年9月にその産声を上げることになる。

第1回展は同年11月、浦和の別所沼近くにあった埼玉県立美術館で行われた。初期の作品の構成や形成方法を見ると、調和を重視した造形観や永続性を求める制作技法等、伝統的な感覚をその基盤としていたことがうかがえる。しかし、作品に用いられた廃材やモチーフとしてしばしば現れる大胆な抽象形態からは、何とかそうした殻をやぶりたいという思いが伝わってくる。

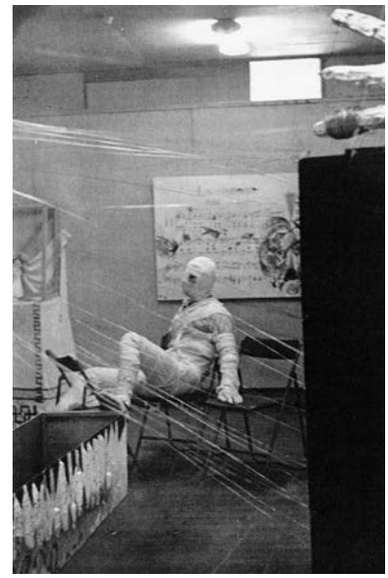
同会は発足以来、県立美術館や県立図書館のホール、秩父市内のデパートなどで、毎年2回ずつの展覧会を意欲的にこなしていった。内部の議論にとどまらず、ヨシダヨシエや中原祐介といった若手の美術評論家を招いて、美術運動に関する研究会を開いたこともあった。このような活動を通して、彼らは個々の美術家としての自己研鑽に加え、ひとつの運動体としての意識を高めていったのである。

「コロシヤ」と題された64年の第7回展は、会独自の展覧会としては最後のものとなった。各会員が自作を持ち寄って会場に設置する一方、最終的にはそれらをひとつの集合作品とすることを標榜した。このことで個々の作品は互いに個性を打ち消し合い、作者の表現における達成感は押し殺される。ここには、個人と社会の相剋の縮図が見てとれる。人は主体としての個人であると同時に、社会の構成要素としての個人でもあるからだ。こうした疎外感を乗り越えてこそ芸術は自己満足を超え、社会に対する影響力を持ち得ると考えたのであろう。この斬新な方法論によって、同展は会のエポック的存在となった。

こうした制作・討論活動と並行して、会員相互の理解を深め合う場として機関誌の『カラス』が制作された。齋藤晃司は『カラス』6号（1964年11月26日発行）の「今後への課題」と題した文章の中で「コロシヤ」展への反省を込めて次のようなことを述べている。「すぐれた作品は…市民、観者の有無が作家の内面における創造に影響していることは事実である。…作品と観者における、ある感情の創造は、共につくり共に選択する意識に通じそれを一つの評価としてとらえることが出来る。否定と変革への出発はそこにあるのであるし、そこに創造の出発点を見ることができるのである。」

ここでは、美術家の運動というのは単に社会に対する喧伝活動だけで推し進められるのものではなく、市民ひとりひとりに対する直接の働きかけがむしろ有効だということが強く説かれる。そして、美術家の内にある創造性というものも、実は観者との意識の交流によって目に見えるようになるのだという、極めて客観的で具体的な主張が示されている。つまり、社会の変革運動と個人の創造活動というのは決して別個のものでなく、密接に結び着いた一連の営為とみなされるのである。

さて、前出の「読売アンデパンダン展」は1964年に突如その幕を降ろした。表向きは当初の目的を達成したためとされたが、実際には、出品作品の多くがあまりに過激となり公共の美術館の展示にふさわしくなくなったためとされている。一方で美術家の側でも、こうした無審査方式による展覧会は、美術館という特権的で閉鎖的な場所でなくもっと開かれた場所で行うべきだという議論がなされるようになっていた。「読売アンデパンダン展」の閉鎖を期にこうした動きが全国的に広まり、各地で屋外や市街地を会場とした前衛的な展覧会が行われるようになった。



埼玉前衛第7回展（1964）、埼玉県立美術館

埼玉前衛第7回展（1964）、埼玉県立美術館

アンデパンダン・アート・フェスティバル（1965）、
埼玉前衛第1会場作品

アンデパンダン・アート・フェスティバル（1965）、
埼玉前衛第2会場作品

そうした中、岐阜を拠点として活動していた「VAVA」は、前衛活動を行っていた全国の個人やグループに呼びかけ、岐阜市内における前衛グループの一大イベントを計画した。こうして実現したのが、1965年7月の「アンデパンダン・アート・フェスティバル」である。

この催しにおいて「埼玉前衛青年芸術作家集団」は2つの出しものを用意した。ひとつは長良川河畔で行われたイベントで、もうひとつは市民センターでのハプニングであった。美術評論家の野村太郎が前述の「コロシヤ」展について、「みんなの制作であって、だれの作品でもない壁面やオブジェ－こうした超個性的な共同制作に進んでこそ、新しい集団のあり方、方向が確認されてくるのではあるまいか。」（『現代美術』1965年2月号）と評したことも拍車をかけ、ここでは真に純粋な共同制作を行うこととなった。

長良川のイベントでは、まだ夜が明けやらぬうちから作業を始め、長良川の河原に無数の塔婆を立てて中央の櫓にマネキンを吊るす。そして日没後、その櫓に火をつけてすべてを荼毘に付すというというものであった。

また市民センターでのハプニングは、次のような手順に則って進められた。まず、自分たちの作品の断片やそこらで拾った廃品の類を思い思いに小箱に詰め、ていねいに包装する。メンバーは、それらを携えて市内のあちこちに出向き、適当なところで忘れたふりをして小箱を放置してくるのである。拾った人がそれを開けると、市民センターへの届け出願いが出てくる。そして当然のことながら、センターの会場には同グループによる遺失物受取所が設けられるという設定である。

ところで、これらには「鵬（なぶり）」という総合タイトルが付けられていた。個の問題から始まり、果ては当時の日本が抱えていたさまざまな社会問題に及ぶ討論を繰り返しながら、この計画は具体化されていった。参加者たちの、この時代に対する解決しようのない思いやわだかまりが、作品のタイトルやこうした表現方法に顕著に現れているように思える。

この頃から、美術家による集団としての活動は徐々に沈静化してゆく。社会運動の重要性を認識しこぞって集団を作って運動を行ってきた美術家たちも、70年代に入るとそこから徐々に距離を置くようになる。自分にとって美術とは何かを考え、また自分の生き方と表現を重ね合わせるような作品がジャーナリズムからも注目されるようになっていた。このような視点に立つ美術家にとって、集団に属することはかえって表現の妨げとなったのだ。

こうした時代の変遷の中で「埼玉前衛青年芸術作家集団」は自然消滅的に解散となる。しかしこのグループの中心メンバーであった五月女幸雄は、しばらく間をおいた1978年、「埼玉前衛青年芸術作家集団」の何人かのメンバーに新たな美術家を加え「埼玉美術の祭典」を立ち上げた。この展覧会は「埼玉前衛青年芸術作家集団」が掲げていた「個々の活動をより広い場に激突、進展させ」ていくという当初からの理念を引き継ぐ、美術家主体の祭典であった。その後、やはり「埼玉前衛青年芸術作家集団」のメンバーであった高木康夫を中心として、「現代美術の祭典」、「コンテンポラリー・アート・フェスティバル」と名称を変えながら、この催しは現在まで続けられている。

今日、美術に対する評価基準は極めて多様化した。制作を行う人々は、それぞれの傾向に合った場所で自由に作品を公表できる時代となった。作品を鑑賞する人たちもまた、表現の多様性を柔軟に受けとめるようになっている。美術表現においても、他と異なることが許される時代になったのだ。かつて使われた「前衛」という呼び名は、社会的圧力から自分たちの活動を守るためのひとつの武器だったのかもしれない。今日の美術表現の多様性を見るとき、「埼玉前衛青年芸術作家集団」が行ったあの熱い戦いの歴史を改めて振りかえらないわけにはゆかない。

[1]本稿は『埼玉県立近代美術館：ニュース〔ソカロ〕』No.72（2000年12月11日）に掲載された文章の転載である。原文の題名は「埼玉の美術家たち22 埼玉前衛芸術作家集団」。当時の記録では「埼玉前衛芸術作家集団」（「青年」がない）の表記が一般的だったが、会則では「埼玉前衛青年芸術作家集団」となっているため本稿ではすべてこれに代えた。

[2]原文には当時の職名（主任学芸員）が付されている。

[3]当初は「日本アンデパンダン展」と称したが、1957年より「読売アンデパンダン展」に改称。